
スプリングフィールド兄弟の活動報告

なおぼん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スプリングフィールド兄弟の活動報告

【Nコード】

N4520BA

【作者名】

なおぼん

【あらすじ】

大戦の英雄、ナギ・スプリングフィールドには2人の子供がいた。弟の名はネギ、兄の名はナリカといった。望まれるべくして生まれた2人は、望まざる英雄の息子という肩書きを背負いながらも肩を寄せ合い生きていく。

魔法先生ネギま！の二次創作ものです。妄想爆発です。「小説」として見れない部分も多々あると思いますが、それでもよろしければどうぞ。

警告タグは該当描写が出てきたら追加。

誤字脱字、または他作品と似た設定や描写があればご一報いただければ幸いです。

第0話 俺がナリカ・スプリングフィールドだ！

俺の名前はナリカ・スプリングフィールド、3歳だ。双子の弟にネギってのがいる。両親はいない。住んでるのはイギリスのウェールズってところにある親戚の叔父さんの家で、従姉妹のネカネーちゃんにはよく面倒見てもらってる。つっても今は学校でいないんだけどな！ そうそう、幼馴染にアーニャってのもいるんだが、こいつも同じく学校でいない。学校って言ってもただの学校じゃない、なんと魔法学校なんだぜ。俺達も来年には入学できるからネギはすごく楽しみにしてるけど俺はあまり行きたくない。なんでかって？

実は俺、魔法が使えないんだ。魔力は弟と同じくらい、いやそれ以上にあるらしいんだが、どうにもこれが魔法に使えない。つっても魔力を放射すれば魔法みたくだカーンってできるし、それを見た周りの大人達もお前はー（魔法が使えなくても）大丈夫だって言うてくれるからそんなに気にしてないけどな。

俺達の容姿なんだけど、俺は金髪でネギが赤髪ってところ以外は殆ど同じ。あ、でも俺の方が釣り目で目の色が左右で違うんだ。この前家に来たタカミチって奴は俺のこと見てなんでかびっくりしてたな。

今日も今日とてネギと一緒に遊んでる。ネギが湖で釣りがしたいって言うからついて来た。

ちなみに湖に落ちるいべんとは消滅したぜ。ネギがネカネーちゃんに父親のことを聞いてからイタズラし始めて、理由を聞いたなら「ピンチになったらお父さんが助けに来てくれるんだ」なんて言うもんだから、「お前が危ないことするとネカネーちゃんが悲しむ、もちろん俺もアーニャもだ。お前は俺達を悲しませたいのか？」って言ったら素直にやめた。たまに鼻歌歌いながら「かっこいいお父さん」の絵書いたりとかヒーローごっことかやってるけどな。

なんで俺がこんな達観してるのかつて？ 近所にスタン爺さんつてのがいてな、俺その人の家によく遊びに行くんだわ。口を開けば汚い言葉しか吐かない癖に、いつも俺達の近くに居るからさ、いつの間にか懐いてた。んで爺さん家にある本を読んだり話したりしてたらこんなになった。ネギはちよつと怖いって言っけど、その実世話焼きなんだぜ。つんでれってやつだ。

なんかいくつかめたはつげんつてのをしたような気がするが関係ない。俺は釣りなんてガラじゃねーんだよ。既に釣竿放り出してサッカーボールで遊んでるけど。あ、そういえば。

「おいネギ、今日つてネカネねーちゃん帰って来る日じゃねーの？」

「あ、そうだった！ 兄さん、早く村に戻るよ！」

「おい、釣竿は！？ って行っちゃった……放置で良いか」

今日はネカネねーちゃんが1ヶ月ぶりに帰って来る日だと思いだしそれをネギに伝えると、奴は釣竿を放り投げあまつさえ俺を置いて先に帰りやがった。あとで拳骨食らわせてやる。そんなことを思いながら先に行くネギを追いかける。十数秒の差があつたがもともと俺の方が身体能力は高めかつインドア派ネギと比べてアウトドア派俺の方が足が速い。あと少しで追いつけると思った矢先、前方を走るネギが唐突に立ち止まった。

「おい、何こんなとこで止まって——」

ネギの背に声をかけながら追いつくと、その視界には火の手が上がり赤々と照らされた村が飛び込んできた。

「ネカネお姉ちゃん、おじさーん！！」

「っおい、馬鹿ネギ何やってんだ止まれ！！」

放心状態の俺の耳に入ってくるネギの声。ハッと我に返れば声を張り上げながら丘を駆け下りて行く弟の姿が。なんで火事なのに現場に行くかなあいつは！

いつもならすぐ追いつくはずの距離なのに、無意識に魔力強化でもしているのかなかなか追いつけない。そうこうしているうちに俺達は村に入ってしまった、やがて何かと相対したまま態勢のまま石となったおじさんと村の人達を見つけた。

「おじ……さん……？」

「っち、バカネギ何やってんだ！　なんかヤバそうだから早く逃げ——」

放心しその場に立ち尽くすネギの手を掴むが、その瞬間背後から水溜りに入ったかのような音がした。恐る恐る振り返ると、そこには俺達よりもはるかに大きい異形の者達が、字のごとく目を光らせて俺達を見下していた。

「あ……ああ………」

「くっ……なんだってんだよ……！！」

恐怖に身を染め上げ震えるネギと、ネギほどではないが恐怖し思考が覚束無い俺。逃げようにも既に全方位を囲まれ、立ち向かおうにも3歳児に何が出来ると言うのか。目の前に立つ怪物が腕を振り下ろし、それが真っ直ぐに向かって来るのを、俺達は互いの手をきつく握りながら見ているしかなかった。

結果的に俺達は助かった。すんでの所で等身大の杖を持った白口

ーブの男が迫り来る怪物の拳を片手で受け止め、そして屠った。それを見た他の怪物達が一齐に襲い掛かったが、その男は圧倒的な暴力でそれを薙ぎ払い、握り潰した。掃討し終えた男は俺達を担いで村外れまで飛び、俺達を降ろすと再び村へ戻り、今度は両膝から下が無いネカネ姉ちゃんを運んできた。ネカネ姉ちゃんを揺さぶるネギと、その隣で男に何者だと尋ねる俺。近付き俺達の頭を撫でたその男は俺達の父親で、形見だと言って杖と指輪をくれた。ネギが杖を抱えて離さなかったので俺は指輪の方をもらい、左手の人指し指に付けた。

3日間助けは来ず餓死するかと思っただが、俺達は無事救助された。ネギはあれから強さを貪欲に求めるようになり、暇さえあれば魔法書を読み漁っている。俺も初めのうちは怪物を一撃で屠る父さんの魔法に憧れたが、結局5年経った今でも魔法を発現できていない。流石に魔法が使えないのに魔法学校にいるわけにはいかないと実の祖父でもある学園長に直談判しに行ったが、そこで爺ちゃんと一緒に待っていたタカミチ―本名タカミチ・T・高畑―に体術を習うことがお主の課題じゃと言われそのまま在学の運びとなった。とは言えタカミチは外部の人間なので不在の時は特例として爺ちゃんか、稀にその従者のドネットさんなんかに教えてもらっていた。ネカネ姉ちゃんやアーニヤとは事件後も変わりなく付き合いが続いている。姉ちゃんの足もちゃんと治って、今では依然と変わらない生活が送れている。

「2人とも、何て書いてあった？ 私はロンドンで占い師よ」

「修行の地はどこだったの？」

「今浮かび上がるとこ」

廊下を歩く俺達兄弟に後ろから声がかかる。アーニヤとネカネ姉ちゃんだった。俺達の修行場所を知りたがっているようで、俺達が持つ用紙を後ろから覗きこむ。発光し始めたのでネギが言うように

そろそろ修行内容が浮かび上がるはずだ。アーニヤは占い師って妥当なラインだったか、どうかな？

「えーと……日本で、先生をすること」

「……ええ……っ!?」

ネギが文章を読み上げてから暫しの沈黙の後、浮かび上がった内容を理解した俺以外の3人の絶叫が廊下に響き渡る。喧しいことこの上ないが、気持ちには痛いほど分かる。俺の用紙にも同じことが書かれていたが、9歳児に何をさせるつもりなんだよ、まったく……。校長の元に殴り込みにかかる女子2人だったが、当然決定が覆るわけもなく。

こうして俺達の教師生活が、遠く離れた地日本で始まろうとしていた。

第1話 麻帆良入りしたんだぜ！

「うわー、ニッポンは本当に人が多いねー。それに女の人がいっぱいだ」

「ああ、そうだな。ここは電車内で、かつ女子校エリア行きだもんな、当然だな」

特に問題もなく時は過ぎ、俺達兄弟は日本へ、麻帆良学園へとやって来た。先の会話で分かると思うが今俺達は麻帆良学園行きの電車に乗っている。俺達以外に男の姿が見られないのはここから先が女子校エリアになっているからで、場違い以外の何でもない。本当はもっと早くに登校するはずだったのに、ネギが寝坊したせいでこんな時間になってしまった。連絡はもうしてあるからそっちの心配はいらない。着いたら頭を下げ続けることになるだろうが。全く、うちの愚弟は頭は良いのにたまに抜けてるから困る。

——何あの子達。外国人？——

ふとそんな声が聞こえてきて顔を上げると、近くにいた女学生数人がこちらを見ていた。ちょっとドキドキする。

「僕達どこ行くの？」

「ここから先は中学、高校だよ」

「いえ、その……ハ、ハハ——」

「やめんかバカタレ」

「へぶう！？」

俺達を見ていた女学生達は俺と目が合うとニカッと笑い話しかけてきた。そこでやっと彼女達の存在に気が付いたらしいネギが焦り

ながらも対応しようとしたが、埃でも鼻に入っただのかくしゃみしかけたので拳骨で解除させる。

「痛いよ兄さん！」

「お前はくしゃみする時に口を押さえないだろうが。この人達の綺麗な顔をお前の汚いもので汚すつもりか？」

「あうう、ごめんなさい」

「やだ、綺麗だってー」

「いいのよ僕、気にしてないわ」

俺が頭を殴ったことに抗議するネギに言い聞かせる。それを聞いて俺が突然殴ったことに怪訝な表情やら不快な表情をしていた女学生達も事情を理解したのか笑顔が戻る。1人は何やらトリップしているが問題ないだろう。まあ、実際の所はネギがくしゃみすると武装解除の魔法が暴発して前方にいる人の服が弾け飛ぶからなんだがウェールズではどれほどの女性が犠牲になったことか……。あちらは魔法使いの土地だったからまだしも、ここは一般人の土地らしいからしつかり秘匿しないといけないからな。飛行機を降りた時点でネギの展開していた障壁も解除させた。

——次はー麻帆良学園中央駅——

「あ、着くよ」

「じゃあね坊や達」

「気をつけてね」

車内アナウンスが流れ駅が近いことを知らせてくれる。昇降口が開くと先の女子学生達は俺達に声をかけてから全速力で駆け出して行った。……あんな飛ばして何で誰も転ばないんだろう。

「つと、俺達も急ぐぞ。本来なら既に遅刻なんだからな」
「う、うん！」

駅から出た俺達の目に飛び込んできたのは魔法使いの俺達をしてありえねえと言わせる程の光景だった。幅20mはあるつかという道路を路面電車が2本並列して走っており、その間を車やバイクも走っている。何より恐ろしいのはそれらの車両以外の道を埋め尽くすほどの人、人、人。事故上等を信条に掲げているのか、ぶつかれば死ぬだろう車両達のそばを脇目も振らず駆け、時に飛び乗り、時に真横を並走する。ああ、ここは本当に魔法の秘匿とかするべき場所なんだろうか……。頭を押さえながら隣を見ると、愚弟はむしろ感動を覚えていた。純粹って幸せだね……。

ハッ、つい現実逃避に走ってしまった。早く行かないと。

「ネギ、走るぞ。身体強化も特例で許す」
「うん！」

足を速くする、打たれ強くなる程度の身体強化ならネギも出来る。とは言っても術式でどうこうしてるわけじゃないただの魔力ドーピングだけど。俺が体術習ってる時に一緒にどうかって言われてたんだけど、こいつは魔法に心酔してたからな。しばらく走ると何やら騒がしい女子2人組を見かけた。ワンとか言ってるし……てネギ！？

「あのー、あなた失恋の相が出てますよ」
「え……」

あの馬鹿……。ネギの失言で彼女の爆弾が爆発する前にネギの頭をぶっ叩く。

「このバカタレがあっ！！」

「もぴゃんっ!!?」

突然の出来事に怒りすらも固まっているその女性―オレンジのロングヘアをツインテールでまとめ、鈴が2つついた髪留めが印象的だ―の前に立ち謝罪。

「うちの愚弟が大変失礼致しました。こいつ最近占いに嵌まっておりまして、良く人に結果を言っんです。加えて僕達イギリス人はものをはつきり口に出してしまうものですから……悪気はなかったのですが、本当に申し訳ない。」

ほらネギ、お前も初対面の人に向かって失礼だぞ、謝れ」

「あの、ごめんなさい……」

「あ……? いや、良いわよ……」

優しい人で良かった。まあ所詮ガキの戯言だし、そこまで気にすることでもないと思ったのか。

「坊や達、こんな所に何しに来たん? ここは麻帆良学園都市の中でも奥の方の女子中エリア、初等部は前の駅だよ」

ツインテールの女性の片割れ、いかにも日本人といった風の艶やかな黒髪を腰まで伸ばしたローラースケートの女性がそう声をかけてきた。

「はい、僕達今日からここで教師をすることになってまして……」

「………はあ!? 教師い……!!?」

「おゝいナリカ君、ネギ君……!」

驚愕に顔を引き吊らせたツインテールの女性にどう言ったものかと思案していると、前方から俺達の名を呼ぶ声が聞こえた。

「やあ、久しぶりだね2人とも。明日菜君も木乃香君もおはよう」

「おっ、おはよーございます……！」

「おはよーございまーす！」

「タカミチ！ 久しぶり！！」

「！？ 知り合いっ！？」

おっせーよタカミチ。つーかお前陰から見てただろ、ちゃんと気づいてんだかな。そんな意味を込めたジト目に苦笑で返したタカミチは俺達の前まで歩いてくるとそう言った。各々が挨拶を返すが、ツインテールの女性「明日菜さんかな？」は俺達がタカミチと知り合いだったのが意外だったらしく大層驚いている。

「彼等とは昔からの知り合いでね、2人とも頭が良いんだ。今日から僕とせずな先生にに代わって担任と副担任をやってくれることになってるんだ」

「そ、そんなあ……」

俺達が赴任してきたことを知り地に崩れ落ちる明日菜さん。まあ、当然の反応だよな……。

「学園長先生！！ 一体どーゆーことなんですか！？」

「まあまあ、アスナちゃんや」

結局何しに来たのか分からないタカミチは明日菜さん達に俺達の案内を任せると今から出張だと言って去って行った。あいつ、後で絶対ぶん殴る。生徒遅刻させんじゃねえよ。……まあ、引き留めてしまったのはこっちなのだが。

そんなわけで学園長室まで連れてきてもらった俺達だったが、明日菜さんはやはり納得できない部分があるのだろう学園長に真っ先に抗議した。学園のトップに怯まずに抗議できるとか、この人勇気あるな。まあ結局取り付く島もなくあしらわれていたが。

「なるほど、修業のため「学園長」……そうじゃな、まず2人には教育実習生として経験を積んでもらうことになるのう。今日から3月までじゃ」

「はい！」

話が裏に関することだったので学園長の言葉を遮るとそのまま本題に入ってくれた。……まさか学園のトップがいきなり秘匿を無視し始めるとは思わなかった。歳でボケているのだろうか？ それともこの2人は関係者なのだろうか？ 秘匿に関しての意識の高さを見たとか？ つーかネギ、全く気づかないで元気に返事なんかしてんじゃないよ。ったく……。

「君達に降りかかる苦労は並大抵のことではないじやろう。失敗は許されぬが、それでもやるかね？」

「は、はいっ、やります！ やらせてくださいっ！」

「うむ、良い返事じゃ。ナリカ君はどうかの？」

「出来る限りのことはやらせていただきます」

最終確認だろう、威圧しながら問いかけてくる学園長。ネギはそれに怯まずに言い切り、俺もネギほど威勢良くはないにしろ誓いを立てた。

「うむ、よろしい。」

ところで2人には彼女はおるのか？ どーじゃな？ うちの孫娘このかなぞ」

「ややわじいちゃん」

形式的なやり取りが終わり、空気が弛緩した瞬間の爆弾発言。ネギはまだそういったことには疎いので大して反応しなかったが、俺はそういったことに興味を持ち始めていたので彼女という言葉にドキツとしてしまう。次の瞬間には学園長にトンカチを振り下ろす木乃香さんを見てしまい一気に体温が下がったが。しかしアレ大丈夫なのだろうか。老体ということもあるが何より音がやばい。人間の頭部ををトンカチで殴ってガスッ！なんて音が出るとは思えない……ん？ それはつまり学園長が人間じゃないということか……？ そんなことを考えていたら木乃香さんと目が合い微笑まれた。その微笑みが窓から入ってくる朝日と相まってとても幻想的で、思わず魅入ってしまった。木乃香さんが彼女……か。

「与太話はここまでにして早速仕事に入ってもらおうかの。指導教員のしずな先生を紹介しよう。

しずな君」

「はい」

学園長の言葉に現実引き戻される。どうやら軽くトリップしてしまっていたらしい。恥ずかしい。指導教員のしずな先生との顔合わせのようだ。学園長がしずな先生を呼ぶと後ろのドアから声がした。振り返るとドアが開き目の前が真っ白になった。

「む……!?!」

「あら、ごめんなさい」

目の前が真っ白になったと思ったなら柔らかい何かに包まれた。頭上からの声と共に視界が開け、視界を塞いでいたのがたわわに実ったバストだったということが分かった。……けしからんおっぱいだ！……ハッ、俺は何を!? 瞬間的に意識が飛んだ気がした。い

つまでも胸を見ているわけにもいかないので視線を上に向けると知的で包み込んでくれそうな雰囲気的美女が俺に微笑んでいた。

「わからないことがあったら彼女に聞くといい」

「よろしくね」

「あ、はい……」

学園長が何か言っていたが聞こえない。ただただその女神の微笑みに見とれていた。

「そうそうもう一つ。このか、アスナちゃん、しばらくは2人をお前達の部屋に泊めてもらえんかの？」

実は住むとこ決まったらんのじゃよなんて暴露し始める学園長。
マジで帰りたいよ俺……。

「もうそんな何から何まで学園長ーっ！」

「かわえーよこの子」

「ガキはキライなの知ってるでしょ!？」

1人沈む俺を尻目に明日菜さんが学園長に再度抗議するも木乃香さんはネギの肩に手を置きながら擁護した。しかし明日菜さんは子供が嫌いらしい。そこに俺達が部屋に上がりこんだらそりゃ怒るわな。

「あの「仲良くしなさい」」

「うぐっ……」

無理強いは出来ないので辞退しようと思をかけようとするも学園長に先を越されてしまった。明日菜さんも引っ込んでしまったし収

まりを見せたこの雰囲気で発言するのまあ。

結局そこで話は終わってしまい、俺達は学園長室を後にするのであった。

第1話 麻帆良入りしたんだぜ！（後書き）

1話目ってこんなに長かったっけww

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4520ba/>

スプリングフィールド兄弟の活動報告

2012年1月12日16時11分発行